

メディシアが運ばれたのは、周囲を機械に囲まれた個室だった。

大仰なコードが剥き出しのまま幾重にも張り巡らされ、壁は完全な金属製。

入ってきたドアもぶ厚く、メディシア単体では破壊は不可能だと一目でわかる。

室内には中央に一人が座るだけの席が用意されていて、メディシアはその椅子の方へ運ばれていく。

「何をするつもりですか？」

一応質問してみたが、当然、マシンロイドたちから返事が来るわけではない。

人型の機械たちが人の言葉を介さず独自のネットワークで意思の疎通を行っているのは過去の調査で明らかになっている。

先ほどの質問は、ただ浮かんだ思考をそのまま言葉にしただけだ。

(すぐに破壊されるわけではなさそう、ですね。だったら……)

マシンロイドたちはメディシアの武装を解除することもせず、淡々と彼女を運んでいた。文字通り機械的に、だ。

そもそも、施設へ突入する際に主兵装の狙撃銃は手放し、先の戦闘で神経毒に侵されたメディシアは白兵戦用のブレードはマシンロイドに回収されている。

武器と呼べるものは持っていない、と判断されたのかもしれない。

——そのおかげで、施設に設置した爆弾の起爆スイッチであるイヤークフは耳についたままである。

(神経毒は……少しずつ弱まってきている。私を殺すつもりはなさそうです。なんの為かは分かりませんが)

メディシアが手足に力を籠めると、指先が僅かに反応する。痛みも無い。

毒が徐々に弱まってきている、もしくは身体が対応し始めているのだ。

(この状態はイヤークフからのバイタルデータとして母艦に転送されているはず。すぐに救助が来てくれると嬉しいのですが)

ホムンクルスは過酷な宇宙空間でも活動できるよう、その肉体を極限まで強靱に設計されている。

まだ本調子とは程遠いが、しかし死を免れたと考えれば気持ちにいくらかの余裕が生まれるのも事実である。

(他の部隊が施設の探索を終えるまで、ここでじっとしていればいいだけです)

メディシアがそう考えていると、彼女は部屋の中央にある席に座らされた。

金属の椅子だ。

銀髪のコムンクルスはその冷たい席にお尻を乗せると、椅子から伸びた金属が手足に巻き付いた。

「くっ……」

身体が動かないので逃げられないと分かっているけど、それでも、四肢が拘束された焦りか

ら表情が緊張に強張ってしまう。

次に、ゴーグルのような機械で視界が塞がれた。

手足を動かせず、何も見えなくなったことでメディシアは余計に焦り、無意識に全身を緊張させる。

(なにをされるの……?)

深呼吸をして、気持ちを落ち着けようとした。

目に映るのは無機質な金属ゴーグルの裏面だけだ。

自由に動かせる首を振るとゴーグルの密着が僅かに緩んだが、すぐに側面からゴムのようなバンドが伸びてゴーグルは頭部に固定されてしまった。

視界が完全に塞がれて、目を開いているはずなのに何も見えない。

(外からの情報が遮断された……?)

いや、そうではない。

『実験体の身体情報を更新中。更新中。更新中……』

(実験体……? 私の身体情報、ということですか?)

メディシアには見えていないが、別室では今回の作戦で捕獲されたホムンクルスの情報が保存されていた。

戦闘の影ですでに数体……だが、メディシアにそれを知るすべはない。

聞こえてきた機械造りの音声の内容を反芻していると、目元を覆っている金属ゴーグルの暗い裏面に白い光が映った。

その白い光はとても遠くにあるように思えて、暗闇と光による錯覚だと頭で理解する。

——頭で理解するが、感覚的に、その光が『とても遠くにある』と感じてしまう。

『実験開始。実験開始——』

(実験……この光が? いけない——)

その音声と光に、とても不穏なものを感じてしまう。

理由は無い。直感だ。

ホムンクルスとはいえ、生物としての直感がメディシアに警鐘を鳴らした。

「こんな事をしても無駄です!!」

咄嗟に、そう声を張り上げた。

そうしなければ思考が光に集中する。その光以外何も見えないし、考えられなくなってしまいそうだ。

それはいけない。

本能的にそう察したから、声を上げたのだ。

(この状況は——いけない。何かわかりませんが、これは……)

胸の奥でどんどん不安が増していく。

『見えない』というのは、これほどまでに人の恐怖心を増幅させるものなのか。

ホムンクルスとして強靱な肉体を得たからこそ、このような状況は初めてだ。

メディシアは反射的に四肢に力を籠めると、何とかこの状況から脱しようと身体を暴れさせた。

「くっ、まだ毒が抜けきってない……」

しかし、神経毒に侵された四肢の動きは緩慢で、力が入らない。

指先がピクッと揺れ、僅かに手首が持ち上がり、身を振った程度。

それだって、金属椅子から伸びた拘束具によって抵抗を完全に封じられてしまっている。

『対象の抵抗を確認』

「な、なに……？」

しかし、その些細な抵抗すらマシンロイドの拘束具は許さないようだ。

金属のゴーグルを嵌めたまま、メディシアが不安に声を震わせる。

塞がれていない耳が、なにか粘着質な不快な音を聞いたのだ。

拘束されていない首を音が聞こえた方に向ける——当然、何も見えない。

けれど金属ゴーグル越しにナニカが居ると分かる。

見えないけれど、すぐ近くで何かが蠢いている雰囲気を感じる。

「誰ですか……？」

マシンロイドは機械だ。生物的な不快な音を立てるはずがない。

だが同時に、自己進化を続けるマシンたちは生態的なユニットを体内に仕込んでいる種も存在している。

メディシアに不意打ちした触手がそうだ。

だがそれは頭部の代わりになる程度の、小さな存在だったはず。

(なにかいる……この部屋、全体に……！？)

しかしメディシアが今感じている気配は、部屋全体に存在しているようだ。

正面、左右、それどころか天井や床まで。

視線を向けるが、目元を覆う金属ゴーグルのせいで何も見えない。

空気の揺らぎ、音、雰囲気。

視界が塞がれているからこそ肌と感覚が敏感になり、それらの僅かな変化が感じられる……ような気がする。

気のせいかな？

メディシアは不安な気持ちを抑えるように、深呼吸をした。

マシンロイドとの戦闘に耐えられるよう強靱な肉体を設計されているが、精神的な面では人間とほとんど変わらない。

「ふう、はぁ……っ……」

ホムンクルスに恐怖は無い……が、視界が塞がれている不安に息が乱れる。

戦闘行為を行っているわけでもないのに心拍数が上がり、これ以上弱みを見せないよう唇を噛んで震える呼吸を抑え込む。

「ん————！？」

(な、なに！？)

次に変化が起きたのは、口元だった。

今度は鼻から口にかけて広い範囲が、なにかに覆われる。

「これは、酸素吸入器……？　こんなもので、なにを」

視界は塞がれたままだが、口元に当たる形状からメディシアは正解を言い当てた。

それは医療行為に使われる酸素吸入器だ。

マシンロイドの一部は医療設備へ搬入されており、病人たちのケアも行っていた。

医療器具のデータも保存されていて、それを流用して何らかの機材として使っているのだろう。

酸素吸入器はホムンクルスが生成された際、その呼吸を助けるためにメディシア達が真っ先に触れる器具ということもあり、すぐに気付けた。

だが、流し込まれるのは酸素ではない――。

『媚薬の放出を開始します。データ測定中、データ測定中』

また、機械的な音声が耳に届く。

メディシアはその言葉を聞きながら、しかし、その言葉が頭に入ってこない。残らない。

集中力が乱れる。意識が目の前の光と、鼻から感じる匂いだけを考えてしまう。

「く、う……」

(これは、酸素じゃない……なにか、甘い……香り……？)

食堂で時折振舞われる嗜好品、アイス。

そのバニラのような甘い香りがした。

あきらかに変だ。危険だ。

このような状況で嗅ぐには異質な甘い香りを警戒してメディシアは息を止めたが、しかしそれはほんの数分だけ。

人間よりも遥かに優れた心肺機能を有しているが、それでも、ホムンクルスも生物なのだ。

呼吸を再開しなければならず、数分の後に甘い香りを肺いっぱい吸い込んでしまった。

「すー、ごほっ……く、この煙……成分はどうなって……」

(そういえば、びやくとか……なにか……)

同時に、ゴーグルの裏に映っていた光が、チカッ、チカッと瞬き始める。

(なに、を……)

何をしたいのか分からない。なにをされているのか分からない。

ただ甘い匂いを嗅がされて、光の瞬きを見せ付けられるだけ。

不安がどんどん大きくなっていく。不安の度合いに合わせて、呼吸が乱れてしまう。

室内には機械の駆動音とメディシアの呼吸音が聞こえるだけとなり、時折、身動きによる戦闘服と椅子が擦れる音が響いてしまう。

(どうして、なにが……)

少しずつ、時間が経つごとに身動きの音が大きくなっていった。頻度が多くなっていった。

それが、ゴーグルに移った光と嗅がされている甘い匂いの効果だ。

メディシアは自分では気づけないが、どんどん思考が乱れ、身体の感度が勝手に上がっていく。

催眠術の一種だ。

人間の長い歴史の中で使われてきた、生物の無意識に干渉する手段。

光を使った催眠術は基本であり、薬物を使用しない自白に用いられた時代すらある。

しかし、化学が発展した今の時代では非科学的であるのも確か——こんな事を真面目に調査することなど、今の人類には時間的余裕がない。

だがマシンロイドなら？

——この機械たちは、その正誤曖昧な効果を実験し、実用段階まで高め、そして今、メディシアに試していた。

媚薬も同じだ。

人類の歴史で正しく『女を発情させる』媚薬というのは存在しない。

あるのは強力な興奮剤で性感を誤解させるものばかり。

だが、本当に『女を発情させる薬』があればどうなるか？

マシンロイドたちは人類を襲いながらその為の研究を並行し、実用段階まで昇華していた。

機械だから可能なこと。機械だから出来た事。

有限で、増殖するにも長大な時間を必要とする人類では不可能——数分で数十体もの同類が増殖し続けるマシンロイドだからこそ可能な、あまりにもバカげた開発だ。

「私に、なに……を……」

金属ゴーグルを嵌めたまま、メディシアが力の無い声で呟いた。

何度も甘い香りを吸収し、目の前に光に意識が集中していく。

瞼を閉じるという選択が、いつの間にか頭から消えていた。

ずっと光を見てしまう。光から目を逸らせない。

等間隔で瞬いていた光が、二つに分かれた。

円を描くように動き、眼球がその動きを追う。

光は更に分裂し、万華鏡のように輝き、暗闇を彩り、メディシアはその光景に視界を奪われる。

——今も、メディシアの姿に変化はない。

銀髪の美少女は機械の椅子に拘束されたまま、動かない。

しかし、何もされていないはずなのに呼吸が少しずつ乱れていく。

浅く、早く、荒く。

肌が赤くなり、うっすらと汗ばみ、身動きをする頻度が多くなっていく。

(あつい……)

メディシアはそう思った。

けれど室温は変わっていない。

——メディシアの体温が上がっているのだ。

ホムンクルスの肉体は人間とは比べ物にならないくらい耐毒性がかなり高い。だが長時間、持続的に与えられたらどうなるだろうか？

「はっ、はっ、はっ……」

そのまま三十分も時間が経過すると、メディシアの呼吸はさらに激しいものへと変わっていた。

気が付くと、甘い香りも気にならない。

それどころか、深呼吸をするように肺いっぱい吸い込めば、脳が蕩けそうなほどの幸福感となって甘い香りが思考を支配していく。

逆らえない。抵抗できない。

呼吸するごとに、どんどん思考も身体も溶けていくような錯覚が深まっていく。

「すー……はー……すう……はあ……」

メディシア・フォースという生物の全部が目の前に浮かぶ光に集中し、手足の感覚すら覚束なくなっている。

宇宙の暗闇の中で輝きを放っていた白磁のように綺麗な肌が、うっすらと赤く火照るほど体温が上がり、汗が滲む。

長時間の戦闘にも耐えられる体力を持っているはずなのに、乱れた呼吸が収まらない。心臓が高鳴り、汗の量はどんどん増えていく。

——気が付くと、時間はもう一時間も経っていた。

「はあ……はあ……はあ……」

何もしないまま、一時間。ただ延々と催眠光を見せ付けられ、媚薬を嗅がされ続けるだけ。

メディシアにとっては、ほんの一瞬にも感じられるのではないだろうか。

自覚していない。

自分が、一時間も甘い香りを嗅ぎ続けているなんて、分かっていない。

目の前で輝く光が、彼女の感覚を狂わせていく。

「ふ、く……くふううつ、ふう、ふううつ……ふうううう……」

自然と呼吸はより荒いものへと変わっていて、何度も肺いっぱい甘い香りを吸い込んでしまっていた。

「はああ……ふうう……はああー……」

(なにも、見えない——呼吸を、止められない……)

生きているのだから当然だ。

だがその『呼吸』こそが、一番メディシアの身体を狂わせていく。

マシンロイドたちは強靱なホムンクルスたちを打倒するための術を、何通りも、何十通りも、何百通りも考えていた。

思考し、改造し、失敗し、思考し、改造し、失敗し——トライ&エラーを何度もホムンク

ルスたちに試し、失敗すれば破壊される。

メディシアたちが自覚していないだけで、これまでの、何十年、それ以上の長い時間の戦闘で試されていたのだ。

失踪者、作戦失敗、戦闘によって破壊——データとして残っているのはそれだけだが、彼女たちのその後もマシンロイドたちの研究は続いている。

メディシアもその一人だ。

ホムンクルスは暴走したマシンロイドたちの失敗例を考え、命令に従うのではなく自分で状況を判断するためにその肉体は人体に近いものになっている。

そう、人間に近いのだ。

肉体も、精神も、神経も。

『反応良好、反応良好。肉体の変調、想定内。——次の実験に移行します』

ただ人よりはるかに肉体が強靱で、それを守る対毒性の能力が高いだけ。

人どころかはるか過去の地球に存在していたという象すら殺しうる神経毒なら動きを封じることができるし、生娘でも発情して狂喜する濃度の媚薬でようやく興奮させることができる。

殺さずに無力化する濃度。

それさえ分かれば、後はそれを量産し、マシンロイドたちの『機械の身体』に共有していただくだけ。『成功例』さえあれば対応する……機械には簡単なことだった。

「は、ハッ、ハッ、ハッ……」

(なに、を？ こ……ここから、なにをするつもり……？)

機械音声の内容を朦朧とした頭で理解すると、警戒心を強める。

けれど、この状態からメディシアに出来る事は何も無い——警戒し、全身を強張らせることが限界だ。

それでも、ホムンクルスの肉体は素晴らしい。

どんどん毒に慣れていく。

象すら殺す神経毒すらたった一時間で緩和すると、手足が動くようになっていた。

指先が動く、足が動く。

大量の媚薬を吸ってピクピクと痙攣しながら、メディシアが拳を握る。

「ハ、ぐ……なんとか、状況を、知らせないと……」

(通信、を……だれか、救助、を……)

思考が自由になると、メディシアはすぐに救難信号を送った。

これで、この場所へ救助隊が駆けつけてくれるはずだ。

しかし同時に、どんどん、嫌な予感が膨れ上がっていく。

思考が少しだけ戻ると、次に浮かんでくるのは再びの不安だ。

この頃になると、インナー越しにも分かるほど乳首が勃起し、クリトリスが膨らんでいた。まだ何もされていないのに、女の身体が、女の反応を示してしまう。

「ふ、う……？ ひっ！？」

悲鳴が上がった。

相変わらず、金属のゴーグルに塞がれた視界は外界の情報を遮断している。

だから、周囲から伸びてきた生物的な柔らかさと滑り気をもつ触手が突然触れると、いきなりの事に悲鳴を上げてしまった。

「な、なに？ これは……？」

『接触実験を開始します。バイタル異常、想定内——続行を許可』

メディシアは硬く握っている拳に重ねられた生暖かいモノが何なのか分からず、疑問の声を上げる。

ソレはまず触感を確かめるようにメディシアの手の口を撫で、その表面が濡れていることが分かった。

「せつ、しょくう……！？ なに、を。なにが……！？」

(ヌルヌルしていて、あたたかい……？ 生物、ですか？)

気持ち悪い。

蛇が這う……いや、舌で舐められているかのようだ。

媚薬で興奮したメディシアの肌に触れてもなお生暖かいと感じる体温、ドロリと重い粘り気のある液体で濡れている。

右手に触れる。それだけでビクッと手が震えてしまった。

マシンロイドと戦う兵士、戦闘員として情けない反応だ。

けど。

「ひっ、あ……！？」

(なに、触られているトコロ、敏感に……！？)

初めての感覚に戸惑うメディシアは過剰に反応してしまう。

そう、初めてだ。

第四世代の彼女はそれなりに長い時間を生きており、若い世代の仲間たちより人生経験が豊富で、娯楽にもいくらか精通している。

それでも、初めてだった。

自分に影響が及ぶほど高濃度の媚薬を嗅がされ、機械ゴーグル越しに光を使った催眠状態にされるなど。

生体兵器であり、生身の脳を有しているからこそ効果的な方法だ。

脳が狂う。誤解する。

ゴーグルの裏で瞬く光が、その感覚を狂わせていく。

そして、並の人間なら嗅いだけで発狂死するような高濃度の媚薬を1時間以上も嗅がされ続けて、狂った感覚がどんどん壊れていく。

「な、なんなの……？ なんなのよ、これは……！？」

(肌がどんどん敏感になって……！？ 私の身体に、何が起きているの！？)

理解できない。自分に何が起きているのか分からない。

不安と未知への恐怖で身体を揺ると、身体を包むレオタードインナーのコスチュームが肌に擦れるのを感じる。

普段なら全く気にならないはずなのに、今では、まるで拷問器具のように強い締め付けに思えた。

はっきりとわかる『未知の感覚』が迸る。

汗を吸ったインナーがしっとりと濡れて肌に張り付き、その下に隠れる肢体に密着すると恥ずかしい突起がうっすらと浮かんで見えた。

乳首。そしてクリトリスだ。

自分でも触ったことが無い性感帯が勝手に反応し、硬くなる。

クリトリスの下では女性器まで反応し、汗とは異なる体液が僅かに滲み、レオタードのクロッチ部分を濡らしていた。

「おか、しい……くひ……ひっ、う……身体の感覚が……」

(基地に戻って、早くメディカルチェックしたい——何なの、この感覚は……!?)

肌はどんどん艶のある色へと変わり、性を知らなかった乙女の身体が急速に最悪の方向へと開花していく。

何とか逃げられないかと身体を暴れさせるが、むしろそれは濡れて肌に張り付いたコスチュームが今まで以上の強さで肌を擦るだけだ。

ピリッとした『快感』が迸り、静電気のように身体を撫でられるとメディシアは「はうう」と甘く蕩けた声を上げてしまう。

「へ、え……?」

(今の声、は……わたし……?)

メディシアはその声が自分のものだとは思えなかった。

聞いたことも無いような声だ。

甘く蕩けた、泣きそうな声。

ホームクルスとして産まれた時から戦い続けてきた自分が上げた声だなんて思えない、女の声。

同時に、擦れた肌がジンジンと疼いて堪らない。

メディシアは無意識に太ももを擦り合わせようとした——が、足の拘束が邪魔をして、それすらできない。

肌が疼く。足の間が疼く。お股が疼く。

ほんの僅かな刺激すら過敏に感じてしまい、自分の身体が本当に自分のものなのかとすら一瞬疑ってしまう。

『性的興奮の上昇を確認。実験を続行』

「なに、を——」

(性的興奮? なにを言っているの?)

メディシアはその言葉の意味が理解できなかった。

知識と走っていても、自分たちホムンクルスには関係の無い単語と認識していたからだ。

試験管の中で生まれ、培養液に包まれて育ち、人間の形はしていても人らしく育てられず、そして誰かを愛することも無い。

活動中のホムンクルスたちの中では年長になるメディシアでもそれは当然の常識で、『快樂』というのに触れる機会は全くなかった。

つまり、『未知』の感覚だ。

「はああ……はああ……ふうう……」

(嘘よ……私が、あんな声を出すはず——)

息を乱しながら動揺していると、気を落ち着ける暇を与えないように手足に触れている触手たちが動き出した。

「はううっ……？ ツ、ひあああっ！？」

ただ剥き出しになっている肌を撫でられただけであられもない声が溢れ、止められない。

必死に歯を食い縛ろうと、抵抗の手目に全身に力を込めようとしても、力が入らない。

目の前で光が瞬いている。

けれど、それとは別の感覚が邪魔をしてどんどん力が抜けていくのが分かる。

「かい、らく……？ これ、が——？」

(こんな、こんなものをヒトは……人間は、感じて……？)

未知の感覚に戸惑っている間も、手足からの刺激は止まらない。

それどころか、メディシアの反応に気を良くした手の甲を撫でていた生態ユニット……触手はどんどん活動の範囲を広げ、腕を上ってきた。

手首から二の腕へ。

しかも今度は両腕を同時……だけでなく、足にも巻き付いてくる。

足首から始まり、ふくらはぎ、膝、そして一気にデリケートな太ももにまで。

「いや、離れ——んヒッ！？ くううっ、あうう！ ンああアアッ、ふアアあ！？」

(なんなの！？ どうして！？ 声が止まらないっ、止められないっ！？ つ、声が出ちゃう、どうしてえ！？)

酸素吸入器の下から、くぐもった声が漏れる。

見えないからか『未知の何か』に舐められる行為は非常に刺激的で、身体が勝手に過剰な反応を示してしまう。

しかも、どのタイミングで、どのように舐められるか分からない。

予想できないので、メディシアは毎回、新鮮な反応を示してしまうのだ。

動揺すればするほど声が上がり、無視したくても手足から上ってくる感覚を無視できない。

腕を撫でられるだけで甘い声が洩れ、まるで無力な少女のように逃げようと身体を揺らしてしまう。

全身に汗が吹き出し、特に、丸出しで何も隠されていない脇がしっとりと濡れてしまう。
戦闘に明け暮れたホームクルスだろうが、その肉体は女性を模しているのだ。

その『女』の本能が目覚めれば、自慰すらしたことが無い、知識としてしか知らない無垢な美少女の身体は悪辣な薬物と技術によって脳と肉体を急速に『女』へと変えられていく。
「あくっ、あふううっ、ひぁあああっ!？」

『肉体反応、問題無し。バイタル、想定内。実験続行。実験続行』

メディシアの悲痛な悲鳴を機械音声は想定内と判断し、実験という名の凌辱が続けられる。

触手が四肢を撫で回すと、それだけでメディシアは甲高い悲鳴を上げた。

金属の椅子の上で肢体がビクンビクンと痙攣し、腰が僅かに持ち上がる。

レオタードインナーの白い股間部分は更に大量の汗と、滲んだ愛液を吸って肌に張り付き、その下にある女性器の凹凸すら浮かび上がっていた。

『快楽の反応、顕著。心拍数増加。発汗の増加。——対象の反応が顕著と判断』

「ちが——さわるな———やゝめ——さわらな、いで……!」

メディシアは無意識にそう口にした。女として、凌辱される恐怖が言葉に変わる。

……しかし触手たちはそこを目指さない。

まだ準備の段階なのだから。

「ふぁ……!？ くっ、うう!？」

突然、ひんやりとした空気が肌を撫でた。

レオタードインナーの一部が破られたのだ。

破られたのは、胸の頂。乳頭。乳首の周辺。

『実験の継続を許可。バイタル想定内、新薬の投薬を許可します』

乳輪とその周囲の一部だけが見えるようにレオタードが破られると、これまでの刺激で僅かに硬くなった乳首が露になる。

「あぐっ、ひぁぁアアッ!？」

僅かな痛みを感じて声を上げたのは、ほんの一瞬だけだった。

乳首をナニカで刺された。

そう感じた次の瞬間には気持ち良さが全身を駆け巡り、媚薬煙を放出し続けるマスクの下で大きく口を開き、メディシアが嬌声を上げる。

生物とは思えない形状のくせに、粘つく触手は機械のような正確さで毒々しい桃色の液体が滴る張りを乳首の先端に刺す。

乳腺だ。

一度も使った事が無い、先進の際に触れる程度の刺激しか感じてこなかった未開発の幼い乳首が、いきなり乳腺へ直接媚薬を流し込まれる。

ギリギリBカップ程度しかない薄い胸の未発達な乳腺に媚薬が逆流する痛みはほんの少しで、それ以上の『未知』の激感が駆け巡りメディシアは目を見開いて声を荒げた。

「あ、アアアッ、ああああああアアアッ！？」

金属のゴーグル越しに、なにをされているか分からない。

けれど、分かる

「胸っ、胸が熱いィィっ！？　なにをしているの！？　私の身体になにをホォォォォォッ！？」

胸の中にどんどん淫液が流し込まれ、Bカップ程度だってメディシアの胸が僅かに膨らみを増してしまう。

かなりの量だ。

硬く閉じていた乳腺を無理やりに外側からこじ開けられる刺激は痛みすら感じるはずなのに、しかしメディシアの声にそのようノア雰囲気は一切ない。

媚薬は肌よりも敏感な剥き出しの肉粘膜に触れ、あっという間にその神経を侵していく。

本人が知らない、見えないところで胸が作り変えられていく。

――しかも両方、左右同時にだ。

「んァ　ァ　ァ　アアッ！？」

（ひっ、左もおおっ！？　何がっ、なにをされてっ、何が起きてっ！？　私の胸がっ、胸がぁアアアッ！？）

溶けるような、燃えるような、消えるような、まったく理解できない刺激だ。

メディシアはホムンクルスとして生まれ、今日までで一度も経験したことのない刺激に耐える方法すら思い付かず、ただ声を上げ続けるしかない。

身体が勝手に暴れてしまう。

金属の椅子がギシギシと軋むが、しかし壊れる様子はない。

『効果確認。新薬 N288 の効果確認。対象への影響、想定内――継続を許可』

「ひ、あ、あ、あっ！？　くる、し――むねっ、私の胸がぁあ！」

どんどん胸が張っていく。

胸の中にナニカが流し込まれていく。

注射なんて生易しい物じゃない。質量のある液体が、どんどん胸に溜まっていくのだ。

ゴーグルで視界を塞がれたメディシアは自分の身に何が起きているのか分からないまま、その衝撃に悶えるしかない。

「はぐ、ハアッ、ハアっ！？　ぐる、じ――やめ、もうむりっ、もうむりいいっ！」

目を見開いて涙を流しながら叫んでも言葉は受け入れてもらえず、視界に映るのは瞬く光ばかり。

苦しい。

キツイ。

けれど、そんな感情よりも体の感覚が鋭敏になっていって、気持ち良くて堪らない。

快感がどんどん身体の内から溢れ、メディシアはまだ何もされていないのにお漏らしをしてしまったみたいに股間を濡らしてしまう。

けれど、無視。

機械は機械らしく、どこまでも無慈悲に、一方的に、淡々と、実験を繰り返すだけだ。

「やめ`っ、もっ、胸がっ、私のむね——おっぱい、こわれ——っ」

本当に、そう思った。

おっぱいが壊れる。爆発する。

肌がパンパンに張り詰め、内側から張り裂けてしまいそうな圧迫感だ。

だが同時に、その圧迫感が乳肉全体に浸透してどんどん感度が上がっていく。

まるで神経が剥き出しになったみたいに、乳肉の細胞が一つ一つ性感帯になったみたい
に。

ギリギリBカップ程度だった胸のふくらみが、数値相応のふくらみへと変わっていた。

乳輪までぼったりと膨らみ、乳首なんて皮が張り詰めて破裂してしまいそうなくらい勃
起している。

「はーっ、はーっ、はー……………!？」

ゴーグルの裏で涙を流しながら、しかし目を見開けば映るのは暗闇の中に浮かぶ光だけ。
光が瞬いている。

目の前でチカチカと光っている。

その光を見ていると、どんどん身体の力が抜けてしまう。

怖いのに、苦しいのに、逃げ出したいのに、抵抗できない。身体が動かない。

「はな、はなせ、はなせえ……」

(逃げないと、いけないのにつ。身体っ、私の身体っ、動いて……!)

どれだけ気持ちを奮い立たせても、しかし身体はどんどん脱力していく。

しかしそんな身体でも手足だけは活発に動き、指や足先を忙しく暴れさせていた。

ほとんど平坦だった胸はこの短時間で信じられないほどふくらみ、乳首は限界だと思っ
ていたところから更に膨らんでいく。

先端からは流し込まれた液体を滴らせ、メディシアが悶えるたびにまるで触ってほしい
とばかりにビンビンに尖った乳首が指揮棒のように揺れている。

「はあ`ーっ、はあ`ー…………っ」

美しい銀髪を汗で濡らしながら荒い呼吸を繰り返し、どんどん汗が噴き出してくる。

戦闘用ホムンクルスとは思えないほど肌を火照らせ、インナー一枚に守られたほぼ無防
備な股間部分はまだ触られてもいないのにドロドロに濡れて、薄布に隠すべき女性器の形
を浮かび上がらせてしまっている。

『嗅覚調整を開始。男性精液の匂いを投与します』

「ふあ、あ`、あ`っ!？」

しばらくすると口元を覆っている酸素吸入器から、さらに濃い色の煙が噴き出した。

マシンロイドたちが調合した、湯気立つように濃い濃度の媚薬だ。

逃げられないメディシア話す術がないまま、口と鼻から直に吸い込んでしまう。



「うぶっ！？ ごほっ、えッ、これ、いぎが——！？ ふあ あ あ あっ！？」
青臭さ、性臭と呼ばれる臭いだ。

その成分は精液に近く、先ほどまで感じていた熟成された果実のような香りとは真逆。
鼻が曲がりそうな異臭。

あまりにも苦い臭いに涙が溢れ、しかし興奮に動揺した身体は呼吸を一秒だって止められない。

臭いと分かっている、駄目だと分かっている、メディシアはおぞましい性臭を嗅いで悶絶してしまう。

眩暈がする。

目の前に映っているたった一つの光が霞んで見えなくなってしまうそう。

なのに、目はしっかりと光を追ってしまうのだ。

こんな状況でも目を逸らせないまま、メディシアは光を見つめながらそのスレンダーな肢体をビクビクと痙攣させ続けた。

「こっ、これっ、吸ったら……あ、だめえ……！？」

強烈な衝撃に思考が乱れ、メディシアはあらん限りの力で首を横に振りたくる。

何とか口元の機械を外そうとするが、しかし酸素吸入器は外れるどころかズレる様子すら無い。

「くさ、いや——この臭いっ、嫌あっ！」

涙が出るくらい臭いの。本心から嫌だと叫んでいるのに。

しかし性臭と一緒に放たれる媚薬煙の影響で、どんどん身体が興奮していく。

(こんな、ッ、こんな臭いでっ！？ これじゃまるで、私……！)

性臭で興奮しているみたいではないか。

そんな変態じみた反応をしてしまう自分が嫌で、メディシアは必死に首を振りたくった。

「いや、ちがう、違う！ こんなっ、こんなの本当に嫌なのに……っ。なのに、ひいっ！？」

『抵抗を確認。対応を許可します』

ゴーグルとマスクで表情の大部分を隠した美少女が美しい銀髪を振りたくりながら悶えれば、責めの変化に連動して手足に巻き付いた触手が蠢いた。

露になっている鼠径部や二の腕が無でられる。

「はひい！？ ひっ、んあああ！？ ひやめっ、やめええ！？」

性感帯とも呼べない箇所からの刺激に、しかしメディシアは引き攣った声を上げると腰を激しく痙攣させた。

(おか、しー——こんなっ、身体が敏感過ぎるっ！？ こんなの——)

「んああアアアあっ！？ はああっ、はああッ！？」

拘束されながら腰を浮かせ、けれどすぐにお尻を金属の椅子に落とすだけ。

メディシア本人の汗で濡れた椅子にお尻が当たるとペチペチという情けない音が響き、しかしメディシアはそんなことを気にする余裕も無い。

呼吸して薄い胸が上下するだけでも衣服に擦れて肌が疼き、流し込まれる性臭によって嗅覚がバカになってしまいそう。

涙が出るほど臭い異臭に苦しみながら、だというのに、肌の疼きが、撫でられる快感が…様々な要素で身体が興奮してしまう。

もう臭いのか嫌なのか気持ち良いのか、頭が、脳が、混乱して自分自身が何をどう感じているのかも分からなくなる。

「はひっ、ひいっ！ ふああああっ、はなれっ、触らないでっ、さわるなっ、さわるなああっ！」

（はだがっ、うでがっ、あしがっ！？ おかしいっ、おかしいおかしいおかしいっ！？）

あまりの敏感さに、自分の身体に何が起きたのかを考える余裕すら無い。

ホームクルスであるメディシアに性経験など必要ないが、知識として性的な情報は有していた。

だが。

「うでっ、あしいっ！？ なんでっ、どうしてそんなところが！？」

（おかしいっ、こんなのっ、普通じゃない……！）

性感帯といえば胸や女性器。

たまに常識とかけ離れた場所を好む男性もいると理解しているが、それでも二の腕や太ももなんて場所が気持ち良くなるなんて情報に無かった。

呼吸だってそうだ。

異臭に悶えながら気持ち良くなるなんて、普通じゃない。

そもそも。

「これっ、これが！？」

（これが『気持ち良い』？ こんなっ、こんな衝撃が！？）

ホームクルスとして生まれ、十数年。

初めて感じた『気持ち良い』という感覚が、あまりにも強烈すぎて意識がトビそうになる。

まるで嵐に襲われる小舟のように、吹き飛んで沈んでしまいそうになる意識を必死に繋ぎ留めるのが精いっぱいだ。

必死に拳を握りながら、メディシアはその衝動に流されないよう自己を保とうとする。

「あっ……あっ……っそ、それっ、だめっ、やめ——！？」

無意識に懇願の声が洩れ、しかし歯を食い縛る事も暴れることもできないまま——乳首から針が抜かれた。

「ふあゝ あゝ ———！？」

突然与えられた新しい刺激と、しかし同時にこれまで刺さっていたモノが抜けた寂寥感を覚えてメディシアの意識が乳首に集中してしまう。

乳首は何もされていないのにジンジンと疼き、その衝動は内側に溜まっていくかのよう。

その衝動はどんどん昂り、メディシアは無意識に腰を揺らし、背を反らし、薄いBカップ

の胸を突き出すような姿勢になっている——その事に本人は気付いていない。

「はあ、はあ……っ」

(むねが、おっぱいが……わたしの、おっぱい、が……っ)

疼く。疼いて堪らない。

胸の奥がジンジンと痺れ、肌は神経が剥き出しになったみたいに敏感で、乳輪と乳首なんて呼吸で身体が上下するだけでも重い衝動を伴ってメディシアを苦しめる。

もし腕が自由なら、メディシアは躊躇わず自分の胸に手を——乳首に指を伸ばしていただろう。

それくらい疼いている。

ジンジン疼いて、触りたくてたまらない。

ゴーグルに塞がれて見えないが、空気がフワッと流れる刺激だけで乳首が痺れて頭の中に電撃が迸った。

胎の奥がキュンッと疼き、メディシアは無意識に腰をへコッと前後に動かしてしまっている。

「おっぱいっ、おっぱい触らせてえ……」

(！？)

その言葉を口にした瞬間、メディシアは違和感を覚えた。

『淫語を確認。催眠状態良好。ホムンクルスへの効果を確認——実験成功』

「ちが——私は、なんて言葉を……！？」

その知識を知ってはいても、戦闘用ホムンクルスが敵陣の真ただ中でそんな言葉を口にするはずがない。

「そんなわけありませんッ！ 私が乳首に触りたいなどと——なんで！？」

(どういうこと！？ どうしてこんな言葉を、私は口にして……！)

驚いている間も、メディシアの目の前では光が瞬いていた。

強弱をつけ、大仰に揺れ、瞳はその光を無意識に追ってしまう。

目を逸らせない。目を閉じることもできない。

意識が集中する。目の前の光に集中する。

「やめてっ！ 私はこんな事、望んでない——！ ちくびなんて触りたく……ふあゝ あゝ あゝっ！？」

叫んだ瞬間、手足に巻き付いている触手たちがまた蠢動を再開した。

腕を揉まれる。足を撫でられる。

そんな些細な刺激にすら甘い声が洩れ、しかし、触手たちは乳首には触らない。

「くっ、うううっ！ こんなっ、こんなあ！？ たたかわないと、たたかわないとっいけないのにっ！？」

(きもちいい、気持ち良いっ！ くやしいっ、悔しいのにっ！！)

なす術も無くて気に身体を嬲られる悔しさを感じながら、しかしメディシアの身体が弓

なりに反る。

ジンジンする。疼いている。疼いて堪らない。

時間が経つごとに乳首の疼きはどんどん酷くなっていく。

空気の流れすら感じられるほど敏感で、インナーを破られたことで何も触れてくれない
放置された乳首。

乳輪も限界まで膨らんで、痛々しいほど勃起して。

なのに、触ってもらえない。

放置される。

しかも、酸素吸入器からは今も性臭が流し込まれ続けているのだ。

「ぐざ、いゝっ……やゝめゝ、っ。とめでっ、とめてくださ——っッッ！」

（くさいのにつ、身体っ、反応してっ！？ これじゃまるでっ、この臭いで——あり得ない
っ、ありえないありえないありえない……っ）

まるで、自分がこの臭い性臭に反応し、気持ち良くなっているみたいではないか。

一瞬浮かんだ思考を、メディシアは全力で否定した。拒絶した。

ありえない。ありえるはずがない——のに。

「うゝ うゝ うゝ うううっっ！！」

胸を突き出すように身体を仰け反らせれば、まだ何もされていない股間から一筋の愛液
が滴った。

「ちくっ、乳首ッ！ 少しでいいからっ、一度でいいからっ、さわってっ！ チクビっ、さ
わってえええっ！！」

メディシアはその言葉の意味も理解できないまま、本能から叫んだ。

このままでは頭がおかしくなってしまうそうだ。

金属ゴーグルの下で熱い涙を流しながら懇願するが、しかし。

「あゝ あゝ あゝ あゝ っ！！」

乳首を放置されたまま四肢を撫でられるだけ。

愛撫とも言えない、性感帯の完全無視。

身体の感度と興奮だけが高められ、しかし本当に触ってほしい所は放置される。

だというのに媚薬煙は放出され続け、ゴーグルの裏では催眠光が瞬き続けているのだ。

「おゝ がじっ、おゝ がじぐなゝ るゝ っ！ わだじがっ、わゝ だじがおゝ がじぐなゝ るゝ うゝ
ううっ！！」

「なゝ んゝ でっ、なゝ んゝ で触ってくれないのゝ ッ！？ ちくびっ、乳首乳首乳首っちくび
があああっ！？」

「ひいいイッ、あああっ、ンああアアアアアアッ！？」

熱い。燃える。爆発しそうだ。

なのに触ってもらえない。無視される。

言葉がどんどん失われ、本能のまま叫ぶことしかできなくなっていく。

ジンジンとした疼きは痛いほどまで昂り、しかもどんどん胸の中に浸透していった。

胸の針は抜かれたはずなのに、感度がどんどん高まっていくのが分かる。

「わだじっ、わだじいいいっ!？」

(こんなっ、こんなの知らないっ!? わからないう、なにをっ、なにをされたの!? なにをされているの!?)

メディシアは必死に思考を巡らせようとするけれど、答えに辿り着けない。

意識はゴーグル裏の光を見つめたまま、思考は乳首の疼きに供覧し続ける。

胸全体が異常なほど敏感になり、本当に神経が剥き出しになってしまったみたいだ。

特に酷いのはやはりその先端。乳首……けれど乳首だけはインナーから解放されているので、なにも触らない——。

「うゝ あゝ あゝ あああッ!! ちぐびざわゝ ってっ、ちぐびいいいいッ!」

『抵抗を確認。無視、実験の続行を許可』

つい数時間前までのメディシアなら絶対に言わなかった言葉を大声で叫びながら、銀髪の戦闘ホームクルスが悶絶する。

しかし、マシンロイドたちにとってこれは確認作業なのだ。

一体どれほどまで、戦闘用ホームクルスの耐久度は耐えられるのか。

ただひたすらに、人間なら発狂する濃度の媚薬を嗅がせ続け、その原液を注射し、性感帯には触れないまま。

「ふぎイイイっ、はあゝ あゝ ああッ、ふああアゝ アゝ アゝ ああッ!？」

メディシアが言葉すら失って野太い悲鳴を上げるようになったのは、それから更に二時間後だった。

計三時間も性臭がする特濃媚薬を嗅がされ続け、焦らされ続けた銀髪の戦闘ホームクルスはついに

「あゝ へゝ ————……、……………」

——白目を剥いた。

脳の許容量を超える焦らしに対し、メディシアの人格を守るためなのか。

生まれて初めて思考が強制シャットダウンされる『気絶』と同時に、メディシアの全身から力が抜ける。

マスクの下で涎や鼻水を垂らしながら、白目を剥いた無様な表情で気絶した。

あまりにも酷い顔だが、しかしマシンロイドたちは気にしない。

第四世代——すでに型遅れの古い個体だが、しかしその耐久性がどの程度のものを情報として回収できた。

そして、次だ。

「……っ……………っっ————ッッ………」

そこからさらに数十分。

気絶したメディシアに特濃媚薬を嗅がせて様子を見ると、彼女は気絶したまま身体をビ

クビクと痙攣させ、股間からは愛液を滴らせていた。

あまりにも酷い状況だが、マシンロイドたちはバイタルの反応を確認し、彼女が生きていることを理解している。

……実験なのだから死なないようにするのは当たり前。

強心剤、栄養剤、水分をちゃんと補給しながらの数十分間は、気絶している間にメディシアの身体をさらに開発していた。

『目標の完全失神を確認。バイタル想定内。次の実験への移行を許可。次の実験への移行を許可……』

機械音声が無慈悲に告げる。

メディシアへの『実験』はまだ終わらず、『次』が宣告された。

——気絶していたのは幸運なのか、それとも不幸か。

彼女が完全に無抵抗になったと判断されると、金属椅子の拘束が外れた。

唯一の逃げる好機——だが、メディシアは動けない。

周囲から新しい触手が伸びてきて、気絶しているメディシアを持ち上げる。

「ん` え` ……」

たったそれだけでも銀髪美少女の華奢な身体が反応し、その整った容姿からは想像もできない低い声が洩れ、ピクッと身体が勝手に小さく震えた。

白目を剥いて気絶していなければ艶めかしい様子としてとらえる事も出来ただろう——だがそれも、機械のゴーグルで隠されているが。

マシンロイドを形成する生態ユニットはそのままメディシアの四肢を何重にも縛り上げ、拘束を完全なものにしてから彼女の装備を剥ぎ取った。

要所を守る装甲が剥がされ、レオタードが破られ、残ったのは手足を守る装甲と、レオタードの残骸、それとヘッドセットだけ。

最後に機械のゴーグルが外されると、涙と涎と鼻水を垂らし、白目を剥いて舌を伸ばしている情けない美貌が露になる。

そこにはもう凛々しい戦闘ホームクルスとしての美貌は無く、敗北した『女』の顔があるだけ。

完全な無力化を確認すると、その全身に触手を巻き付けた。